

コンドルズ

“失敗を繰り返してチャレンジ”

取材・文＝望月リサ（ライター）



大学時代のモダンダンスコンクールで知り合った面々が中心となって始まったダンスカンパニー、コンドルズ。主宰で演出・振付を担う近藤良平曰く「一緒にお酒を飲んで楽しい人を誘った」というメンバーたちは、それぞれに会社員や講師、アーティストや俳優など、ダンサー以外の顔を持っている。それだからなのか、彼らにはカンパニーという枠に縛られない自由さがある。それは、メンバーそれぞれがコンドルズの意味を、“観客に見せる”だけでなく“自分たちがおもしろがれる”活動として捉えているからなのかもしれない。ダンスだけでもない、コントだけでもない、その独自のスタイルは、そんな彼らのスタンスから生まれたもの。彼らはメンバーであり、そしてまたコンドルズを誰よりもおもしろがっているファンなのかもしれない。

コンドルズをやらない理由が見つからない。

近藤 コンドルズのメンバーって、“一生懸命やっています”、っていうスタイルを好まない人々の集団だと思うんだよね。きっと、みんな個々には一生懸命になっているものはあるんだろうけど。

石淵 それぞれが、コンドルズだけが活動の軸じゃないっていうこともあると思う。コンドルズで僕らがすごいお金持ちになるようなことがあれば、また変わってくるのかもしれないけど（笑）。



近藤良平
Ryohei Kondo

コンドルズ主宰・振付家。第四回朝日舞台芸術賞山修司賞受賞。TBS「情熱大陸」出演。「AERA」の表紙にも、宮崎あおい主演「星の王子様」、NHK教育「からだであそぼ」などを振付。同番組内「こんどうさんのたいそう」ではレギュラー出演も。また、NHK総合「サラリーマンNEO」で話題の「サラリーマン体操」を振付。出演。横浜国大で非常勤講師も務める。ペルー、チリ、アルゼンチン育ち。

藤田 まあ、そもそも、そういうところを狙ってやっている訳でもないし（笑）。このところ公演の回数が増えて、多くの人に知られるようになったけれど

どみんな、やらなきゃいけないという義務感より、なんとなくやっていたらこうなったっていう感じじゃない？

小林 僕らにとっては、昔は公演が時々あって、たまに集まる集団だったのが、公演が増えたことで前よりも集まる回数が増えたっていうだけのことでしょ。

近藤 ただ、公演の回数が少しずつ増えていって、ひとつひとつの中身や強度みたいなのは変わってきた気はするよね。

藤田 ひとつの作品のなかに、メリハリができてきたってことになるのかな。

小林 そこに辿り着くまでに、何度失敗を繰り返してきたか…。

小林顕作 Kensaku Kobayashi

「宇宙③コード」演出家。96年の立ち上げからコンドルズ参戦。コンドルズ作品中のコント脚本も担当。ジャニーズの舞台、阿佐ヶ谷スパイダースを始め客演多数。NHK教育「わたしのきもち」レギュラー出演中。ラジオ、TVのCMのナレーションもあまた。主演映画「ひきもどり」も好評を博した。

